

第33話（18頁） 切れないナイフ

ばかな男が、とても切れるナイフをもっていました。男はナイフでくぎを切りはじめました。ナイフでくぎは切れませんでした。

すると、男はこう言いました。

「ぼんくらナイフめ！」そして、そのナイフで、どろどろのヨーグルトを切りはじめました。

ナイフで切れめをつけたとおもうと、ヨーグルトはすぐにまたくっつきます。男は言いました。「ぼんくらナイフめ、ヨーグルトも切れやしない！」そして切れるナイフをすててしまいました。

「最初から結論が出ている。そもそも『ばかな男』の話だと前置きしているんだから。アーズブカでは、こういう展開は異例だ。」

「ある男が、と書き出すのがトルストイ流だと思うんだけど、ね。」

「最後に、ばかな男の話でした、と…。違う、トルストイ流なら、それも書かないで終わるんだった。」

「ナイフを使って挑戦したのは、まず釘を切ること。次はヨーグルトを切ること。どちらも、ばかな男だと知って読み進めるから、どうなるかのワクワク感が生じない。」

「ヨーグルトを切るなんて、どうしてそんな変なことを思いついたのか。何の目的だったのか。どうしようもないぐらい馬鹿だと言いたくなっちゃう。」

「くぎを切ることも含めて、動機がない。というか、動機の見当がつかない。」

「トルストイも、ある男が、と書き始めたけど、途中で、ばかな男が、と書き直したと想像してみたらどうかな。」（笑い、うなずく人も）

「教訓としては、宝の持ち腐れ、豚に真珠、猫に小判、というところか。」

「せっかくの『とても切れるナイフ』なのに、『ぼんくらナイフ』と思いきりで捨ててしまった。馬鹿な行為がもう一つ加わった。」

「適材適所の必要を反語的に訴えているのか。ものは使うべきところで使うものだ、と。」

「人は己の器量でしか物事を計れない。そんな警句にも通じているね。」

「話は違うが、ここでは動詞『切れる』がいろいろと意味が違って出てくる。切断される（くぎ）、裂け目ができる（ヨーグルト）、切れ味が鋭い（ナイフ）、といった具合だ。」

「へえー。もともと（頭の）切れない男が、ナイフに八つ当たりして、とうとう切れてしまった、というストーリーか（笑いの渦）。」